



とある論文の日付

佐賀大学農学部の宗伸明先生からバトンを受けました。福井大学の内村です。宗先生とは、年齢も、そして何かと境遇も近く、以前は研究室もお隣同士でした。宗先生が九州支部の庶務幹事をされた際には、私も会計幹事をさせて頂きました。

研究者にとっての喜びの一つは、やはり論文が通った瞬間ではないでしょうか。ご存知のとおり、論文にはふつう、投稿した日とアクセプトされた日が記載されています。もちろん、得られた結果については、一日でも早く原稿を書き上げて投稿する必要がありますが、私の場合、なかなか筆が進みません。また、例えば依頼された原稿の場合、その締切と家族の誕生日が近い時など、誕生日にあわせて投稿することがあります。そんな公私混同なことをするのは私だけでしょうか？

今から4年前、投稿していたある論文の返答がきました。レビュアーのコメントを見ると、大変評価して下さいている方が2名と、ほぼリジェクトという評価の方が1名でした。ただ、エディターが好意的な評価でしたので、この論文の時には、丁寧に回答・修正すればエディターの判断で掲載許可がもらえるかも、と思っていました。

修正を重ね、あと1回見直してWEB上で再提出しよう、という段階になりました。金曜日の夕方でした。その時、妻から電話がかかってきました。「陣痛が始まった。できればすぐ来てほしい」という内容でした。その時期、ちょうど二人目の出産を間近に控えていたのです。

私は、すぐ病院に向かうか、あるいはこの論文を再提出してから向かうか迷いました。電話の声がそれほど切羽詰っていなかったこと、長男の出産の時には病院で長時間付き添った記憶があったことから、生まれるのは明日かな？と感じていました。「今、この仕事を中断すると土日を挟むことになるので、できればすぐに再提出したい。」そんな思いとともに、もう一つ、あることが頭をよぎりました。それは、「今日この論文を再提出すれば、エディターが掲載許可を出してくれるかも。そうすると、もしかして、娘の生まれる日とアクセプト日が一致するのではないかな？」ということでした。

論文の投稿日と誰かの誕生日を合わせることはそう難しいことではないですが、アクセプト日と誕生日を合わせる、しかも年まで合わせるというのは、なかなかできるものではありません。「生まれるのは明日だろう。明日は土曜日。土曜日に海外のエディターは仕事をしているだろうか？時差はどうなっているだろうか？そもそも

も、エディターがOKを出すということが甘い考えかも・・・」などと、文字にすれば長いですが、そのようなことをほんの少し考え、とにかく急いで仕事に取り掛かりました。実際にはWEB上での操作に何かと時間がかかり、2時間ほどかかってやっと再提出できました。

急いで車に乗り出発。病院まで2時間半の道のりですが、ふと、夕食をどうしようかと考えました。「病院に着くのは真夜中、もちろんそれから何か食べられる状況ではないだろうし、今夜はまだまだ長丁場だろうし・・・。」ということで、道中にあるうどん屋で急いでうどんを食べました。

病院には日付が変わろうかという時に到着しました。娘はまだ生まれていませんでした。苦しみつつ頑張る妻を気遣いながら、途中、うどんを食べてきたことを伝えると、明らかに不満そうな顔をされました。

ほどなくして娘は無事に生まれました。その週末はほぼ病院で過ごし、月曜日に研究室でメールを確認すると、アクセプトの連絡がありました。そして肝心なアクセプト日は、なんと誕生日と同じ日でした。「ありがとうエディター！土曜日に仕事をしてくれて。」今でも本当に感謝しています。かくして、娘とその論文は同じ誕生日になりました。論文の最後にはこう書かれています。「Accepted February 29, 2008」。今年、娘は4歳になりました。私にとってうるう日は、4年に1度、この出来事を鮮明に思い出す記念日になったようです。また、このリレーエッセイも、きっと記念になると思います。公私混同のご批判、甘んじて受け入れます。

このように私にとっては思い出深い出来事なのですが、今でも妻に言われます。「大事な娘の出産の時に、のんきにうどんなんか食べてきて！」と。この原稿を書くに当たり、今まで伝えていなかった、この日付に関する一連の経緯を初めて伝えました。しかし、なぜかうどんのわだかまりは解消されませんでした。娘がもっと大きくなってこのエッセイを読んだ時、はたしてどちらの味方になってくれるのでしょうか。

次のエッセイは、九州大学工学部の財津慎一先生にお願いしました。以前、同じ研究室に在籍し、そのストイックな仕事振りに、私も見習わなければと常々思っておりまして。仕事に加え子育てもお忙しい時期にお引き受け頂いたことに感謝しております。

最後にもう一つだけ。このエッセイには日付の記載はありませんが、原稿提出は次女の誕生日にしました。

〔福井大学 内村智博〕